

# 近江の石造文化

## 中山道にそって

### はじめに

近江は日本の中央に位置し、しかも京都・奈良の都に隣接し、東西を結ぶ東海道・中山道、北陸を結ぶ北国街道・西近江路が通り、縄文時代以来の日本文化の縮図が見られるところではあります。

近江のどの街道を歩いても文化財や古戦場が多く、数えきれないほどの史跡があります。膳所茶臼山古墳、大津京跡、紫香樂宮跡、小篠原の銅鐸24個が出土した大岩山、家形石棺の丸山古墳、安土城跡、大中の湖南遺跡、姉川古戦場、賤ヶ岳古戦場など。古社寺では延暦寺、日吉神社、三井寺、石山寺、金剛輪寺、西明寺があり、仏像、庭園、石造文化の国宝・重要文化財に指定されたものは多く、奈良・京都以上のものがあります。

仏像彫刻についてみると、国宝と重要文化財に指定されているものは、奈良464件、京都333件、滋賀県は365件で、全国第2位です。石造遺品で文化財に指定されているものは、全国でおおよそ300点あり、京都が49点、ついで奈良、滋賀とつづき、国・県指定を含めると、滋賀県は46点あります。また、石造関係の市町村指定文化財は、県内で139点あり、件数の多い市町村は、日野町26点(町指定件数中60%)、甲西町15点(42%)、栗東町11点(22%)、大津市9点(12%)、五箇荘町8点(42%)、安曇川町7点(35%)です。なかでも、新旭町は町指定件数5点中、石造文化財は4点(80%)を占めています。(国指定の多いところは、大津市10点、蒲生町7点、守山市・日野町各5点、竜王・野洲町各3点)。

### 石造文化財

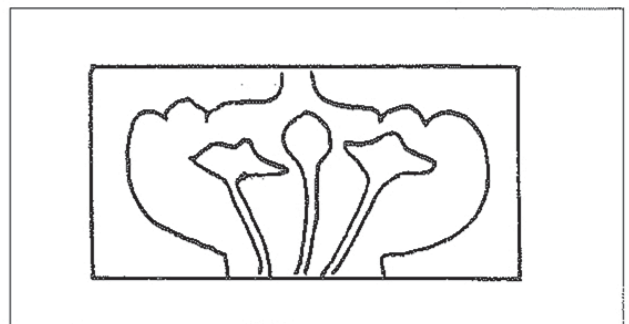
1986. 7. 31

石造文化財とは、石を材料として作られた遺品で、その形が人工的に形成され、かつ、それが文化的財産とか文化遺産といわれるものを指します。原始時代の石棺や石室、石製品のほか、歴史時代に入って造形されたものを含みますから、その範囲は極めて広いものになります。一般に石造文化財というと、石塔や石仏を指し、そのほとんどは野外の土の上に立っています。一つの石造文化財を通じて、その土地の歴史、信仰、石材や地方色というものを知ることができます。古社寺に見られる壮大な建築物とちがって、道ばたにある石仏や石塔こそ、その土地に密着した文化財です。

### 中山道にそって

〈善勝寺〉 栗東町御園にあるこの寺に、宝塔(本シリーズ7号参照)と仏足石があります。宝塔はほぼ完全な形で、台石の四面に珍しい文様があります。「三茎蓮」といって、中央に花か蕾、左右に葉をつけ、三本の茎が画かれています。この文様は近江から発生し、遺品も多いので、「近江式文様」といっています。近江から西日本に伝わり、九州まで見られますが、関東には見られないものです。

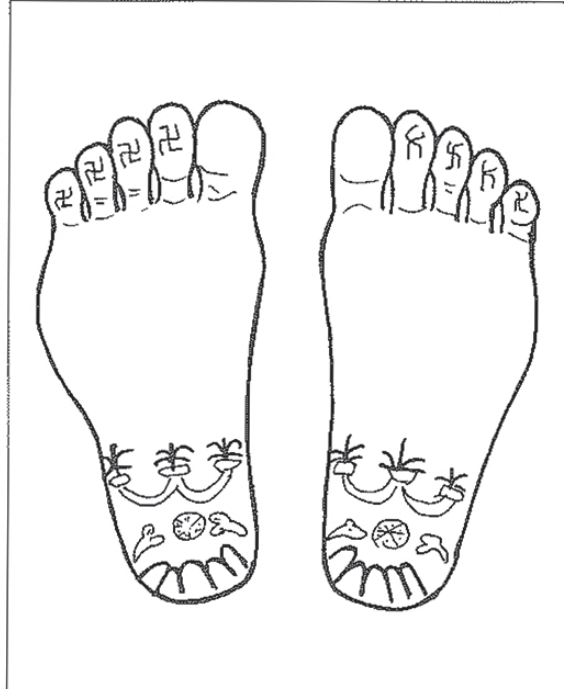
ここの三茎蓮は花瓶はなく、中央の直立し



栗東町善勝寺宝塔台石文様模写(三茎蓮)



善勝寺宝塔(栗東町御園)



善勝寺仏足石模写(栗東町御園)

石塔が三基も並んで残っているのは、移築されたとはいえ、大変珍しいものです。中央の層塔が重文、左右は重要美術品です。

中央の五重層塔の台石は低く、四面には文様は全くありません。台石の上にある立方体の塔身には、薬師如来、弥陀如来の仏像

た茎に蕾をつけ、左の葉は内向き、右の葉は外向きにつけ、茎は太く、蕾や葉は大ぶりです。

本堂前の庭園に仏足石があります。仏足石とは、インドにおいて釈迦がなくなってから、仏の足うらを石に刻んだもので、それを礼拝する風習が生まれ、それが中国をへて日本にも伝わりました。江戸時代には各地に作られ、滋賀県内では10ヵ所ほどあります。

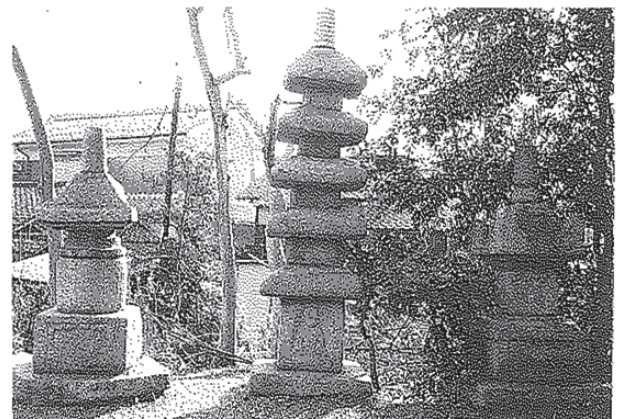
この仏足石は、足の長さ48.5cm、最大幅21cmで、土ふまずのところは本来「干輪」(多数の棒が輪状に出ている)という図がありますが、ここは全く文様がなく、かがとのところに植物の文様化したものが線刻されています。指先は親指に不明な文様があり、他の指先すべてに卍字を配し、きわめて簡単な造りです。成立年、造立者は不明です。

〈東門院〉 東門院は中山道に面し、本堂は東向きです。ちょうど、比叡山のま東にあたります。楼門と本堂、その前を流れる小川は一見して古寺らしく、寺号を比叡山守山寺と号し、天台宗山門派に属します。

境内の左端に、三基の古塔が並んでいます。右から宝篋印塔(シリーズ13号参照)、五重層塔(シリーズ6号参照)、宝塔で、このように、

が彫られ、興味深いのは前後二つの石を合わせているところです。また、屋根と軸とを別石で作るところは古い形式で、同じ層塔でこのように別石で造っているのは多くありません。

仏像の彫られているところが層塔の主体部といわれ、この部分の形状で時代判定ができます。この塔身の高さは49.9cm、幅は46.4cm、幅に対する高さの比率は1.08で、古いものほど高くなります。参考に時代のわかっている層塔として、米原町の松尾寺九重塔が1.05(文永7年=1270)、木之本町の西徳寺七重塔は1.09(弘安10年=1287)ですから、鎌倉



東門院石塔(左から宝塔、五重層塔、宝篋印塔)守山市守山町



時代中期後半のものです。

東門院の五重塔もほぼこの頃、つまり1260～1270年代のものとも見ることができます。

また、仏像のかわりに梵字が彫られている場合は、字体が大きいもの、彫りの深いものほど古い遺品です。

〈鏡山塔〉 竜王町鏡は中山道の宿場で、源義経元服池や宿泊の跡があります。竜王繊維工場の手前を西の方山手に登っていくと、山林内に日本に二つとない見事な宝篋印塔に出会います。別名「鏡山鳥影宝篋印塔」といい、この種の塔は日本に三基あり、他の二基は京都にあります。

台石には向かいあう二羽の孔雀が彫られ、塔身の四隅に怪鳥像が飾られています。この鳥が「ふくろう」とか「迦陵頻伽」

(極楽の世界にいるという想像上の鳥で、美しい鳴声を発します。)とかいわれ、なぞの鳥です。台石の孔雀、塔身の四隅の鳥を眺めるだけで、心を楽しませてくれます。造立した年代が刻まれていませんが、恐らく、鎌倉後期中頃、すなわち1310年頃のものといわれます。



鏡山塔台石孔雀文様

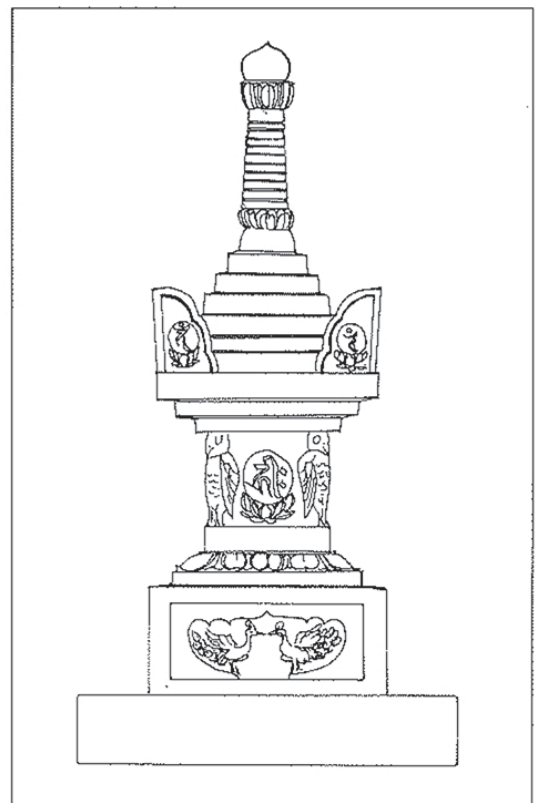


鏡神社宝篋印塔(竜王町鏡)

ここから、更に登ると八角形の石灯籠(シリーズ21号参照)があります。応永28年(1421)の銘が竿に刻まれています。一般に、竿は丸型ですが、ここは八角型です。また長い竿の中間に帯がありますが、この石灯籠には帯はなく、中台も側面のない蓮台式になっています。火袋に如来像が刻まれ、一般の石灯籠と形式がちがっていますから、別名「石幢式石灯籠」



八角石灯籠(竜王町鏡)



同左 立面図



と呼ぶ人がいます。

〈五個荘〉 町内中央部を東西斜めに中山道が横切り、近江商人の旧宅があちこちに見られます。ここは、日野・蒲生・竜王町ほどの石造文化財はありませんが、町内各地に小ぢんまりとしたものが点在し、鎌倉仏教文化の後進性を示しています。

国道石塚から北に入ると金堂があり、「金堂の馬場」に正安2年(1300)の五輪塔(シリーズ16参照)が建っています。近江で2番目に古い五輪塔ですが、全国から見ると24番目のもので、五輪塔については、近江はかなり遅く造立されています。今後の調査によってはまだまだ発見される可能性があります。

国道梁瀬から北へ1キロのところにある河曲神社の道ばたに宝塔があります。台石の四面には近江文様もなく、わずかに元徳3年(



金堂馬場五輪塔(五個荘町金堂)



河曲神社宝塔(五個荘町河曲)



妙光寺地蔵磨崖仏(野洲町妙光寺)



福寿寺手水鉢(近江八幡市岩倉)

1331)の造立した年代があるのみです。

地元では、輪番でまわってくる社守の人が、毎月1・15日に神酒・神饌物を供え、村中の安全を祈願しています。(池内順一郎氏提供)